

# デイモンとピシァス

鈴木三重吉

青空文庫



これは、二千年も、もつとまえに、希臘ギリシヤが地中海ですつかり幅はばを利きかせていた時代のお話です。

そのころ、希臘人は、今のイタリヤのシシリイ島へ入り込んで、その東の海岸にシラキュースという町をつくっていました。そこでも市民たちは、やはりみんなの間からいくたりかの議政官というものを選んで、その人たちにすべての支配を任せていました。或あるとき、その議政官の一人にディオニシアスという大層な腕うでききがいました。

デイオニシアスは、もとはずっと下級の役に使われていた人ですが、その持<sup>もちまゑ</sup>前の才能一つで、とうとう議政官の位地まで上つたのでした。この人のおかげでシラキュースは急にどんどんお金持になり、島中のほかの殖民地に比べて、一ばん勢力のある町になりました。

それらの殖民地の中には、アフリカのカーセイジ人が建てた町もいくつかりました。シラキュースはそのカーセイジ人たちと、いつもひどい仲たがいをしていました。デイオニシアスは遂<sup>つい</sup>にシラキュース人を率いて、それらのアフリカ人と大戦をしました。そして手ひどく打ち負<sup>まか</sup>してしまいました。

そんなわけで、デイオニシアスはシラキュース中で第一ばんの

幅利きになりました。それでだんだんにほかの議政官たちを押し  
のけて、町中のことは自分一人で勝手に切り廻すようになりまし  
た。

ディオニシアスははずいぶんわがままなざんこく惨酷な男でした。市民  
たちは彼のいろいろな乱暴から、ディオニシアスを蛇へびのように憎  
み出しました。しかし、市民もほかの議政官も、彼の暴威おそに怖れ  
て、だれ一人面と向って反抗することが出来ませんでした。

ディオニシアスには、市民たちが、すべて自分に対してどんな  
考えを持っているかということが十分分っていました。ですから、  
しじゅう、ちよつとも油断をしませんでした。いつだれが、どん  
な手だてをめぐらして、自分を殺すかも分らないのです。ディオ

ニシアスはそのため、最後にはもうどんな人をでも疑わないでおかないようになりました。

彼は牢屋ろうやの後にある、大きな岩の中を、人に分らないように、そつと下から掘り開けてあ、その中へ秘密の部屋をこしらえました。そしてそこへ、牢屋から罪人の話し声がつたわつて来るような仕かけをさせて、いつもそこへ這入はいつてじいつと罪人たちの言つてゐることを立ち聞きしていました。

それから、自分の寢室へは、だれも近づいて来られないように、ぐるりへ大きな溝みぞを掘りめぐらし、それへ吊橋つりばしをかけて、それを自分の手で上げたり下おろしたりしてその部屋へ出這入ではいりしました。  
或あるとき彼は、自分の顔を剃そる理髪人が、

「おれはあの暴君の喉のどへ毎朝髪剃りかみそりをあてるのだぞ。」と言つて、人に威張つたという話をきき、すっかり氣味をわるくしてその理髪人を死刑にしてしまいました。そして、それからというもの、もう理髪人をかかえないで、自分の娘たちに顔を剃らせました。しかし後には、自分の子が髪剃かみそりを持つてあたるのさえも不安心でならなくなりました。それでとうとう鬚ひげを剃るのをやめて、その代りに、栗の殻からを真赤に焼かせて、それで以て、娘たちに鬚を焼かせ焼かせしました。

或日彼は、アンティフォンという男に向つて、真しんちゆう鍬くわはどこから出るのが一番いいかとたずねました。すると、アンティフォンは、

「それはハーモディヤスとアリストゲイトンの鑄像のが一ばん上等です。」と答えました。デイオニシ阿斯は愕おどろいて、忽たちまちその男を殺させてしまいました。ハーモディヤスとアリストゲイトンの二人は、希臘ギリシヤのアゼンの町の勇士で、その暴君のピシストラツスという人の子供らを切り殺した人たちです。この二人の像がアゼンに立っていました。アンティフォンは大胆にもそれを引き合あいに出して、デイオニシ阿斯にあてつけを言ったのでした。

また或とき、デイオニシ阿斯は、友人のドモクレスという人が、たった一日でもいいから、デイオニシ阿斯のような身分になつて見たいと言つて羨うらやんだということを聞き出しました。それですぐにそのドモクレスを呼んで、さまざまの珍らしいきれいな花や、



香料や、音楽をそなえた、それはそれは、立派なお部屋にとおし、出来るかぎりのおいしいお料理や、価のたかい葡萄酒を出して、力いっぱい御馳走ごちそうをしました。

ドモクレスは大喜びをしました。しかし、そのうちにふと顔を上げて見ますと、自分の頭の真上には、鋭く尖とがった大きな刀が、一本の馬の尾の毛筋で真つ逆さに釣り下げられていたので、びつくりして青くなりました。これはディオニシアスが、おれの境遇は丁度この通りだということを見せてやろうというので、わざわざ仕組んだのでした。

ディオニシアスは、こんな乱暴な人でしたけれど、それと一しよに、一方には大層学問があり、色々の学者や詩人たちを、いつ

も側そばに集めていました。そして自分でもどんどん詩を作りました。或ときディオニシ阿斯は、フィロセヌスという学者が、自分の作った詩をけなしていると聞いて、大層怒おこつて、すぐにつかまえて牢屋へ入れました。

そのうちにディオニシ阿斯は、また一つ詩をつくりました。そして自分では、こんな立派な詩はちよつとだれにも作れまいと大得意になつて、早速フィロセヌスを牢屋からよび出して見せつけました。フィロセヌスがその詩を読んでしまいますと、ディオニシ阿斯は、どうだ、それでもまだ悪いというか、と言わぬばかりに、相手の顔を見下しました。

するとフィロセヌスは、何にも言わずに、くるりと獄卒の方を

向いて、

「おい、もう一度牢屋へ入れてくれ。」と言いました。

ディオニシアスもこのときばかりはくすくす苦笑いをしました。そして、相手の正直なことを褒める印に、そのまま解放してやりました。

二

しかし、ディオニシアスについて伝えられているお話の中で、一ばん人を感動させるのは、怖らくピシアスとデイモンとのお話でしよう。

この二人は、どちらもピサゴラスの学徒と言つて、ピサゴラスという、ずっと昔にいた学者の教えを奉じている人たちでした。

ピサゴラスという人は、どんな人で、どんなことを説いたかということ、今ははっきり分つておりません。ただ、この派の学徒たちは、すべて感情を殺すということ、その中でもとりわけ怒を押えること、そして、どんな苦しいことでも、じつとがまんするということ、人間の第一の務めだと考えていました。こういう風に自分の感情や慾望を押えつけることを自制と言います。ピサゴラスの学徒は、人間はこの自制が少しでも多く出来れば出来るほど、それだけ神さまに近づくのだ、生がい完全な自制を以て突き通して来た人は、死んだ後には神さまになれる、その反対に、

少しでも自分を押えつけないことが出来ないで、いろいろの悪いことをしたものは、次の世には、獣や、またはそれ以下の動物に生れて来るのだと信じておりました。

それらの学徒は、お互に、いつも固く団結して、いろいろの学問を修めていました。特に数学と音楽とを一ばん大切なものとして研究しました。

その学徒の一人のピシアスという人が、シラクユースに来ておりましたが、それがいつもデイオニシアスに反抗しているように睨にらまれて捕縛されました。デイオニシアスはいきなり死刑を言いわたしました。

ピシアスは、それでは仰おおせのままに殺しておもらいしましょうと

言いました。しかし、そのまえに一つお願いがあります、私は希<sup>ギリシ</sup>臘<sup>ヤ</sup>に土地を持っており、身うちのものもおります。それで、一度あちらへかえって、すべてのことを片づけておき、すぐにまた出て来て処刑を受けますから、どうぞしばらくの間お許しを得たいと言いました。

デイオニシアスはそれを聞いて嘲笑<sup>あざわら</sup>いました。そんなにして、まんまと遠い海の向うへ遁<sup>に</sup>げた後に、またわざわざ殺<sup>まる</sup>されにかえる馬鹿があるものか、そんなふざけた手でこのおれが円<sup>まる</sup>められると思うのかというように、からからと笑いました。

ピシアスは、

「しかしそれには、私がかえるまで、身代りになってくれるもの

がいますのです。私の友だちの一人がちゃんと引き受けてくれるのですが。」と言葉をついで言いました。

「ははは、それはお前がからかわれたのだよ。そんなことで、むざむざ命を捨てるお人よしがどこにしよう。」とディオニシアスは笑いました。

すると、そこへデイモンという人がすかさず出て来ました。

「どうぞ私をピシアスの代りにおとめおき下さい。もし、ピシアスがあなたを欺いて、御指定の日までにかえってまいりませんでしたら、すぐに私をお殺し下さい。」と言いました。

ディオニシアスは、デイモンのその申出を聞いて、むしろびつくりしてしまいました。そして、よし、それではピシアスの言う

とおりにさせてやろうと言いました。ともかくそれは、デイモンの馬鹿さ加減を試す<sup>ため</sup>のに丁度おもしろいと思つたからでした。

デイモンは代つて牢屋へ閉じこめられました。デイオニシアスは、獄卒に言いつけて、たえずデイモンの容子<sup>ようす</sup>を見張りをさせておきました。しかしデイモンは、いつまでたつてもちよつとも不安そうな容子を見せませんでした。

「私はピシアスを信じている。ピシアスは立派な人だ。決してうそはつかない。もし、万一、あの人のかえりがおくれたとしたら、それは、彼のわるいせいではなく、やむをえない不意の出来ごとが妨げをしたのである。そのときには私はよろこんであの人の代りに殺されて見せる。」



デイモンはこう言つて落ちつき払つておりました。

ところがデイオニシアスが考えていたように、とうとう定めの日が来ても、ピシアスはそれなりかえつて来ませんでした。デイモンはそれでもまだ平気でいました。

「これは来る途中で海が荒れでもしたのに相違ない。何、私が殺されればそれでいいではないか。」とデイモンは獄卒に言いました。

デイオニシアスは、それ見ろと笑いました。そして、いよいよ今日の何時までにかえらなければお前を殺すからそう思えと言ひわたしました。

間もなくその時間が迫つて来ました。デイモンは容赦なく死刑

場に引き出されました。獄卒は死刑の道具をそろえて待つていました。デイモンは、もう二、三分間もたてば冷たい死骸しがいになってしまうのです。しかし彼は、その間際まぎわになつても、ピシアスは決してうそをついたのではない、ただ、やむをえない事情でおくれたのだと信じていました。

すると、そこへ、ピシアスがひよいとかえつてきました。ピシアスはデイモンの手を取つて、ああ、丁度間に合つてよかつたと喜びました。そして、にこにこ笑いながらデイモンと代つてしずかに死刑を待つていました。

デイオニシアスはすっかり愕おどろいてしまいました。

そして、即座にピシアスの罪を許してやりました。こんな立派

な人を殺すことは、いくらこの暴君にだって出来るはずはありません。ディオニシアスは、それから改めて二人を自分のそばへよびました。

彼は、これまでかつて人を信ずることの出来なかつた、哀れな人間です。彼はしたいままの乱暴をしました。そうしておいて自分の命を少しでも長く盗むために、あらゆる人をうたぐ疑りました。そのためには多くの人をどんどん殺したり押しこめたりしました。ですから彼はピシアスとデイモンとの二人のこの信実と友愛とを見ると、本当に何よりもうらやましくてたま堪りませんでした。

彼は二人に向つてたのみました。

「どうぞ、これから私をもお前さんたち二人の仲間に入れておく

れ。そして三人で本当の友だちになりたい。」

こう言って、ピシアスとデイモンの手をとったということです。

# 青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集」文泉堂書店

1975（昭和50）年

初出：「赤い鳥」

1920（大正9）年11月

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# デイモンとピシアス

鈴木三重吉

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>